

---

# 魔法少女リリカルなのは ～輝きの翼～

紅の牙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～輝きの翼～

### 【Nコード】

N3349BA

### 【作者名】

紅の牙

### 【あらすじ】

輝く翼をもつ少年は、その翼で何を守るために拳を剣振うのか。

この小説は、魔法少女リリカルなのは～勇気の翼をもつもの～の改変版です。駄文ですが、よろしくお願いします

## プロローグ

俺は夢を見ていた、金色の髪をし、紅い瞳の少女の夢を

（何で、お前はそんなに悲しい目をしてるんだ？）

俺は聞いた。だが、少女は何も答えず、ただ黙っているだけ。そして、少女が何かを言おうとしたとき。目覚ましが鳴り、俺は目を覚ました

「……………また……この夢か。今月に入って何回目だ、この夢を見るのは？」

俺はベットから降りると、カーテンを開き、窓を開けた。開けると、風が流れてきた

「……………何かやな予感がするな」

俺がそう呟くと

「兄さん、おはよう」

弟のタカトが部屋に入ってきた

「おはよう、タカト」

「お母さんが、ご飯出来たから降りて来いって」

「解った、今行く」

タカトが下に降りると、俺は着替え、あるものをポケットに入れリビングに向かった。この日から戦いが始まるなんて、俺は思っ  
て  
み  
な  
か  
っ  
た

## 第01話

大 side

俺がりビングに降りてくると、既に全員がそろっていた

「おはよう、大。珍しいな、お前が遅く起きるなんて」

ソファに座り、新聞を読んでいる父さんがそう言った

「俺もそう思うよ。母さん、姉ちゃん、おはよう」

「「おはよう、大」」

俺達は席に着き、

「「「「いただきます」」」」」

朝食を食べ始めた

「・・・そう言えば、僕。不思議な夢を見たんだ」

「夢？」

食べている途中、タカトが話始めた

「うん。ある男の子が森にいてね、変な怪物と戦ったんだけど、負けちゃったんだ。っで、助けを呼ぶところで目が覚めたんだ」

「へえ〜」

「そう言えば、兄さんはどんな夢を見たの？」

タカトが聞いてきたので

「前に話した内容と同じさ」

「前につて、金髪の少女の夢か？」

俺の話を聞いて、父さんが質問した

「っそ、このごろよく見るんだよね・・・何でだろう？」

「案外、運命の出会いの前兆じゃない？」

「まさか」

姉ちゃんに言われ、俺はあり得ないと言った

「ほら、二人とも早く食べないと、遅刻するよ」

「おっと、そうだったな」

母さんに言われ、俺は止めていた箸を再び動かした

朝食を食べ終えた、俺とタカトは家を出て、バス停に向かった。バスが来、乗り席を探していると

「タカト君、大先輩こっちです」

奥から声が聞こえた。見ると、3人の少女が手を振っていた

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん」

「よう、アリサちゃん、すずかちゃん、なのはちゃん」

俺とタカトは奥に向かった

「おはようございます、大先輩、タカト君」

「おはようございます」

タカトはなのはちゃんの隣に座り、顔を少し赤くしながら話していた、よく見るとなのはちゃんもそうだった

「（青春だね〜）」

俺はそれを見ながら、誰にも気づかれないように笑った

学校に着くと、俺達は別れ、俺は自分の教室に向かった

「うーす」

俺が教室にはいると

「よう大、おはよう」

「つよ、タイキ」

親友のタイキが俺に話しかけてきた

「悪いんだけどよ、宿題見せてくれないか？」

「またか、少しは自分でやったらどうだ」

「やってるんだけどよ、色々頼まれて時間が取れなくてな」

「・・・はぁ、お前のほっとけないは尋常じゃないからな」

俺はため息をついた

「ははははは」

俺はタイキに宿題の書かれたノートを渡し、席に着いた

そして、放課後

俺はタイキと途中まで一緒に帰り、家に帰ってきた



「ただいま」

「お帰り、大」

「父さん？珍しいね、こんな時間にいるなんて。・・・なんかあったの？」

俺は父さんに聞いた

「ちょっと、厄介ごとが起きてな。母さんと一緒に行かないといけないんだ」

「そっか」

俺は納得した。俺の家は全員が魔道士である。父さんは時空管理局と呼ばれる組織の執務管で母さんはその補佐。姉ちゃんもある執務管の補佐である

「暫く家を空けるが、大丈夫か？」

「まあ、何とかなるよ」

俺は父さんにそう言った

「大、お前にこれを渡しておく」

父さんは俺に機械を渡した

「・・・これは？」

「タカトのデバイスだ。本当は俺から渡したかったんだが、そうも言ってもらえないからな」

「……解った。俺から渡しておくよ」

「済まない。じゃあ、行ってくる」

「行つてらっしゃい」

こうして、父さんは任務に向かった。暫くするとタカト帰ってきて、俺は父さんと母さんが出張で家から離れると言っておいた（タカトにはまだ魔法の事は教えていないため）

そして、その日の夜遅く、部屋でのんびりしていると

「（助けて）」

念話が届いた

「……今のは念話、一体誰が？」

俺が不思議に思っていると、ドアが勢いよく開き、閉まる音が聞こえた

「……まさか、タカトの奴今の念話を聞き取ったのか!？」

俺は自分のデバイスと父さんから渡されたデバイスを手に取り、急いでタカトの後を追った

「シャイン、起きろ」

俺は走っている途中、相棒のシャインニング・ウィングに声をかけた

『どうしたんだ、マスター？』

「厄介ことが起きた。一気に終わらせるぞ」

『・・・了解』

「セットアップ」

俺はBJを纏うと、空に飛翔した

「あそこか」

俺は魔力反応が起こっている場所に近づくと、桜色の柱が上がった

「何だ！？」

『この魔力量、AAA+はあるぞ』

「タカト並だと！？」

目を凝らし、よく見ると、見知った顔があった

「・・・まさか、なのはちゃんにも魔道士としての資質があったなんてな」

俺は知り合いの隠れた才能に驚いていた

『どうするんだ？』

「まずは様子見だ。危なくなったら、援護するさ」

俺はその場で止まり、なのはちゃんの戦闘を見始めた。驚いているのか、動きが良くなり、祖に隙をついて、怪物が攻撃してきた

「シャイン」

『了解』

俺は左手の掌を怪物に向け

「トライデントリボルバー！」

高速、高威力の魔力弾を3発撃ち、怪物を撃ち抜いた。そして、誰かの助言が入り、なのはちゃんは呪文を唱え、何かを封印した

「…………お前を主に渡せなくて悪かったな、デューク」

俺はタカトのデバイスに謝った

『気にしないでくれ、いずれ主に渡してくれば問題ない』

「…………そうか」

俺はその場から離れ、家に向かい、タカトが帰って来るのを待った

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3349ba/>

---

魔法少女リリカルなのは ～輝きの翼～

2012年1月8日18時46分発行